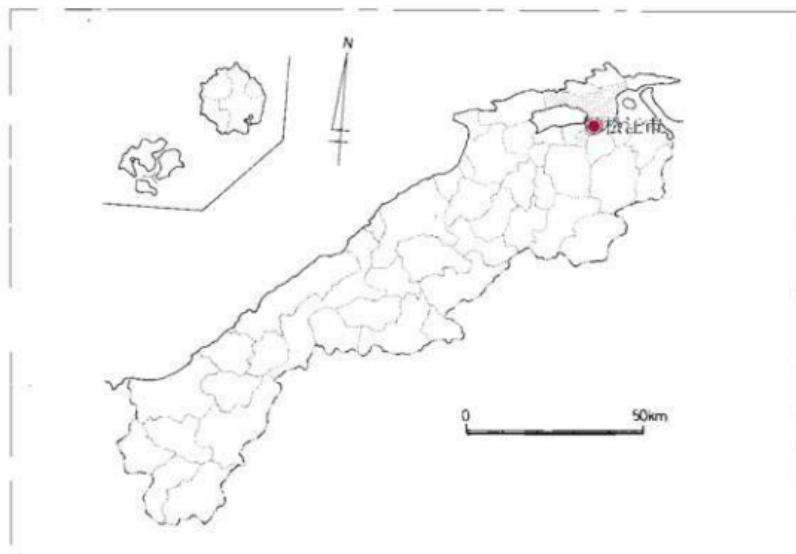




田和山古墳群発掘調査概報

1991年3月

松江市教育委員会



(島根県地図)



(松江市地図)

0 2km

田和山古墳群発掘調査概要報告書

1. 本書は、平成2年度において松江市教育委員会が実施した田和山古墳群発掘調査にかかる概要報告書である。
2. 本調査は、松江市教育委員会が日本電建株式会社松江支店の委託を受けて実施したものである。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

委託者 日本電建株式会社松江支店長 中谷 正
受託者 松江市 代表者 松江市長 石倉 孝昭
主体者 松江市教育委員会 教育長 謙訪 秀富
事務局 教育次長 北村 悅男
社会教育課長 杉原 精訓
同課文化財係長 岡崎雄二郎
調査担当者及び調査員 同課主事 中尾 秀信
同課嘱託員 稲田 瑛

4. 調査の実施にあたっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
調査指導 山本 清氏（島根大学名誉教授）、渡部 貞幸氏（島根大学法文学部助教授）、川原 和人氏（島根県教育厅文化課管理指導係長）
調査協力 山本 静男氏（株式会社竹中土木山陰営業所長）、児玉 宏文氏（株式会社竹中土木山陰営業所課長）、池田 利夫氏（有限会社真幸土木専務取締役）
5. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。
6. 本書の編集及び執筆、図面の作成等は稻田の協力を得て中尾がこれを行った。

目 次

I. 調査に至る経過	3
II. 位置と歴史的環境	5
III. 調査の概要	6
(1). 遺構の概要	6
(2). 遺物の概要	15
IV. 小 結	18

I. 調査に至る経緯

平成元年5月2日、松江市教育委員会に日本電建株式会社松江支店から、田和山地区の宅地造成計画とそれに伴う埋蔵文化財の分布調査依頼書が提出になりました。

田和山地区には多くの遺跡が存在することが以前から知られていましたが、今回提出された分布調査依頼書にもとづいて、同年6月6日に造成が計画されている区域内で再度分布調査を行ったところ、古墳9基（前方後円墳1基、方墳6基、円墳2基）、墳丘墓1基、神社跡地1所、上塙墓群と考えられる平坦地1所の合計12ヶ所で遺跡が存在するらしいことが判りました。

翌平成2年には、この造成計画に関連して田和山の南方にある大久保池周辺の分布調査を実施しましたが、ここでも7ヶ所で遺跡があるらしいことが判りました。

こうしたことから、松江市教育委員会では田和山地区の開発に伴う発掘調査については慎重に対応することとし、最も大きい前方後円墳について事前に発掘調査を実施して遺跡の価値を確認することになりました。

現地調査は平成2年7月30日から同年9月14日まで行い、対象とする古墳（田和山1号墳）の一部調査と周辺の遺跡確認のためのトレントン調査を行いました。この調査の概要について以下に報告したいと思います。



田和山古墳群遠景

第1図周辺の道路分布図



周辺の遺跡一覧

番号 名 称 概 要		番号 名 称 概 要	
1 田和山古墳群	古墳13基	13 奥山遺跡	土師器片
2 田野白社跡	長方形の基壇あり	14 下沢遺跡	石斧・圓石・黒曜石・石錐
3 葉帥前遺跡	弥生式土器・須恵器片	15 乃木二子塚古墳	前方後方墳(38m)
5 福富II遺跡	石斧	17 洪谷遺跡	土師器・須恵器片
6 蓮花垣遺跡	石臼・たなき石	18 深田遺跡	
7 屋形遺跡	砥石・石斧・須恵器片	19 清谷古墳群	
8 松本遺跡	土師器片・赤瑪瑙・碧玉	20 勝負谷遺跡	
9 福富I遺跡	石斧	21 勝負谷古墳	
10 乃白玉作跡	砥石	22 神田遺跡	
11 大久保遺跡	土師器片	23 友田遺跡	土壙墓・四隅突出型他
12 大久保古墳群	古墳4基	24 長砂古墳群	方墳13基

II. 位置と歴史的環境

田和山古墳群は、松江市役所の南方3.5kmの松江市乃木福富町・乃白町・浜乃木町にまたがる標高約50mの独立した小丘陵にあります。

松江市教育委員会では、昭和55年から57年にかけて、この丘陵の北東に隣接した丘陵で発掘調査を行いました(注1)。この調査によって、ここには友田遺跡群と呼ばれる弥生時代の土壙墓27基と墳丘墓5基のほか、四隅突出型方墳と呼ばれる特殊な墳墓が発見されました。また須恵器も古い時代のものが多く含まれており、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な複合遺跡であることが判っています。

近くには全長38mの前方後方墳である乃木二子塚や、石錐等が出土して縄文時代の遺跡ではないかと考えられている下沢遺跡があり、この地域一帯は松江の歴史を知る上で重要な場所であることが判ってきました。

田和山丘陵には、『出雲風土記』に記載されている野白社の田社地をはじめとして、たくさんの古墳が存在していることが知られていましたが、友田遺跡群の調査と並行して、昭



長砂古墳群(昭和55年当時)



友田遺跡群

和55年当時に分布調査を行ったところ、10ヶ所にのぼる古墳と住居跡か上墳墓群の可能性のある平坦地があることが判りました。

こうしたことから田和山全体がその優美な山稜と共に古くから近隣の人々の大きな信仰を得ていたのではないかと想像されるのです。

注1. 松江圏都市計画乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(1983年) 松江市教育委員会



乃木二子塚古墳(昭和56年当時)

III. 調査の概要

(1) 遺構の概要

田和山1号墳は松江市乃白町字友出1,289~1,291・1294・1294-1・53-7・53-8番地にあります。測量の結果、古墳は東西に長軸を向けた全長約20mの前方後円墳で、前方部長8m、後円部長12m、高さは約2mありました。後円部の中央にわずかな窪みがあって、「コ」の字状に細長い石が幾つか露出していましたので、最初は組合せの石棺ではないかと考えていました。

調査の方法は、古墳の東西の軸線に沿って幅50cmほどの堀をそれぞれに設けて、表土から少しづつ覆土を除去していく方法を取りましたが、10cmほど覆土を除去したところ、後円部には思ったよりたくさんの石材が使われていることが判りました。こうしたことからこの古墳の主体部は一辺2mのほぼ正方形の横穴式式石室ではないかと推察されました。このため、墳丘の表土を除去して本来の盛土をさがす一方で、石室内の調査も平行して行うこととしました。また、墳丘にはそれぞれの方向に幅の狭いトレンチを設定して古墳の大きさを確認しようとしたが、上層の重なり合いがそれぞれのトレンチで異なっていて、今回調査では完全に把握することが出来ませんでした。

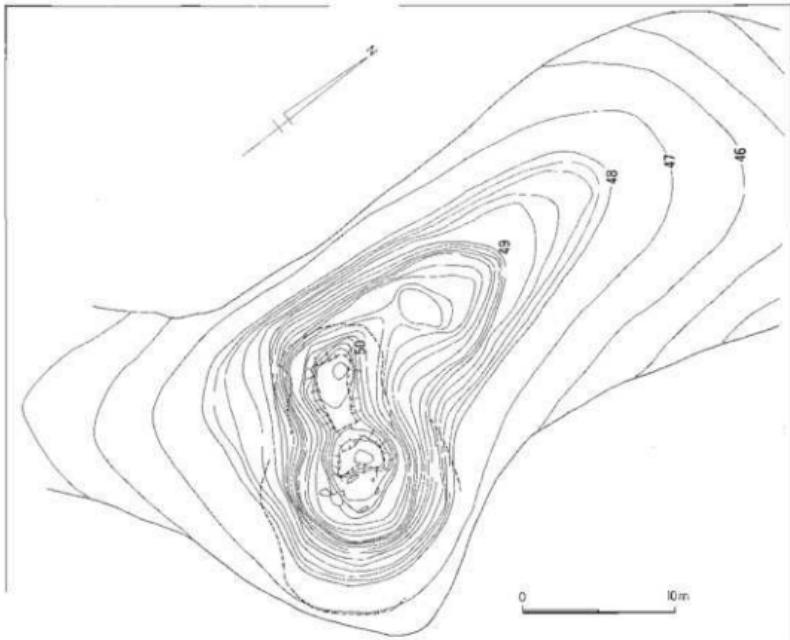
石室内の調査は、最初に石室の長軸と思われる方向に沿って、東側半分の上砂を床面より約10cm残して取り去り石室内の埋土状況を



弥陀原横穴群 第4号穴



田和山 1号墳近景



第2図 田和山 1号墳測量図



第3図 田和山1号墳玄室実測図

確認しました。上解を確認した後に西側の土砂も同様に取り去って、最後に床面を確認しながらすべての埋土を取り払いました。

その結果、古墳の後円部に、北に開口した長さ2.4m、幅1.7mの横穴式石室を主体部に持つことが判りました。

石室は、左側壁4枚、奥壁3枚、右側壁5枚の腰石で構成され、玄門部には左右にそれぞれ高さ約65cmと70cmの玄門石を立てています。積み石は一部で2~3段残っていましたが、いずれも後円部東端に向かって大きくずれています。また、天井石に使用したと思われる石材は、玄室内にも古墳周辺でも発見されませんでした。腰石の高さは50cm~70cmで、一部で確認したところ18cmの厚さがありました。

これらのことから、石室の構築は尾根の東側を水平に削って床面の基盤とし、これに左右の玄門を立てて左側壁、奥壁、右側壁と一巡するように腰石を配置して玄室を作り、その上に2~3段の石積みを施し、平坦な大石を数枚のせて石室としたものようです。

墳丘は山米の南北に延びる尾根を利用して、これを削り出して前方部とし、こうして排水された土砂や石室の構築の際の土砂を、石空を中心とする東側の後円部に盛り上げて古墳を形造ったものと思われます。

羨道部は、石空に対する後円部の大きさから考えると構築する余地はほとんどありませんので、こうした理由によって省略されたものと思われます。また石室内の埋土状況からは、天井石が後世いずれかに転用されたのちに、床面を人為的に数10cm埋めたものとも考えられます。

石室床面は中央から南側奥壁部分を径10cm前後の偏平な石を敷き詰めた砾床と呼ばれる作りです。また中央南壁側には、長さ40cm、幅20cmの2個の石が床面を二つに分割するように置いてあり、その石の上には壺蓋が1個発見されました。その右側（石室南壁西側）には3個の壺蓋と1個の壺身が、何れもふせた状態で、東西に直線的に並べられていました（第4図）。

西端のつまみの付いた壺蓋の上には、長さ81.1cmの直刀（1号直刀）の茎（なかご）が乗るようにして右壁に平行に埋納されていました。石室のほぼ中央には、南北に向けて長さ58.8cmの直刀（2号直刀）があり、その北東側に長さ30cmの短刀が二つに折れた状態で発見されました。また付近には鉄具（かこ）と呼ばれる鉄製品も検出されています。鉄具は今でいうベルトのバックルで、これに革か布製のベルトが付いていたと思われますが、その痕跡は確認出来ませんでした。その他に、石室内の6箇所で鉄錐片が、何本もまとめ置かれていたり或いは散乱した状態で、計9本以上検出されています。

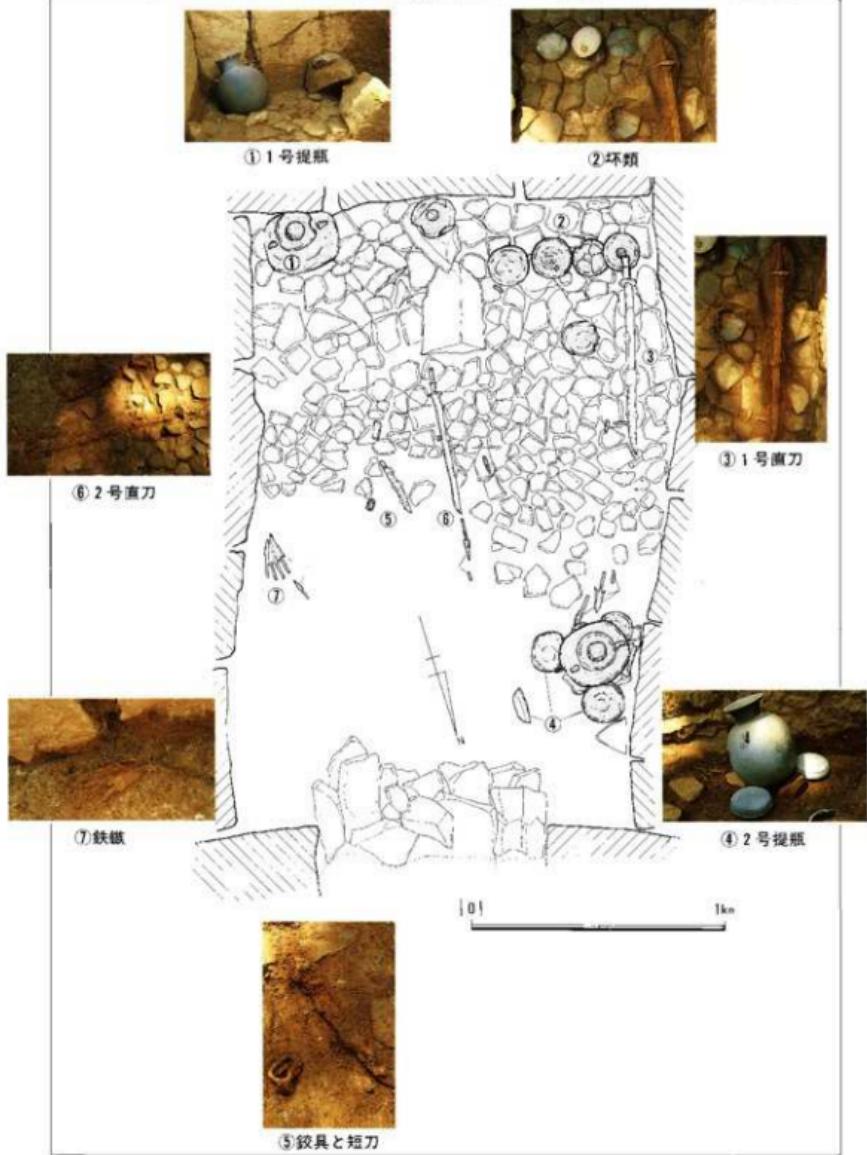
南東角と北西壁には高さ31.6cmのほぼ同型の大型の提瓶が垂直に立てた状態で置いてありました。南東角の提瓶（2号提瓶）は、礎床をわざわざ取り去って浅い溝を作つて置いたもので、さらにその周囲を礎で囲んでありました。北側の提瓶（1号提瓶）も設置する場所の四方を礎を使って台を作りそこに置いたあとで、礎と提瓶の間に須恵器の蓋環を合わせたり、蓋を削ったりして垂直に立つようにはめこ込まれていました。

床面に堆積していた土砂を少しづつ取り去っていくと、石室の南西の隅に並べてあった4個の蓋環の下から、直径2mmほどの青や緑色をしたガラス製の小玉が発見されました。最初に床面を二分割するように置かれていた2個の石の下にも、このガラス製の小玉が見つかりましたが、発見出来たのはあわせて10個だけでした。この2個の石の上には蓋環が置いていましたが、石の下にはガラス小玉があったということから、最初に床面を作った時には、この石は置いていなかったものと思われます。そして、最初に埋納されていたガラス小玉製の製品を何らかの理由で取り去った後に、もう一度石を置いて床面を分割したのではないかと考えられるのです。

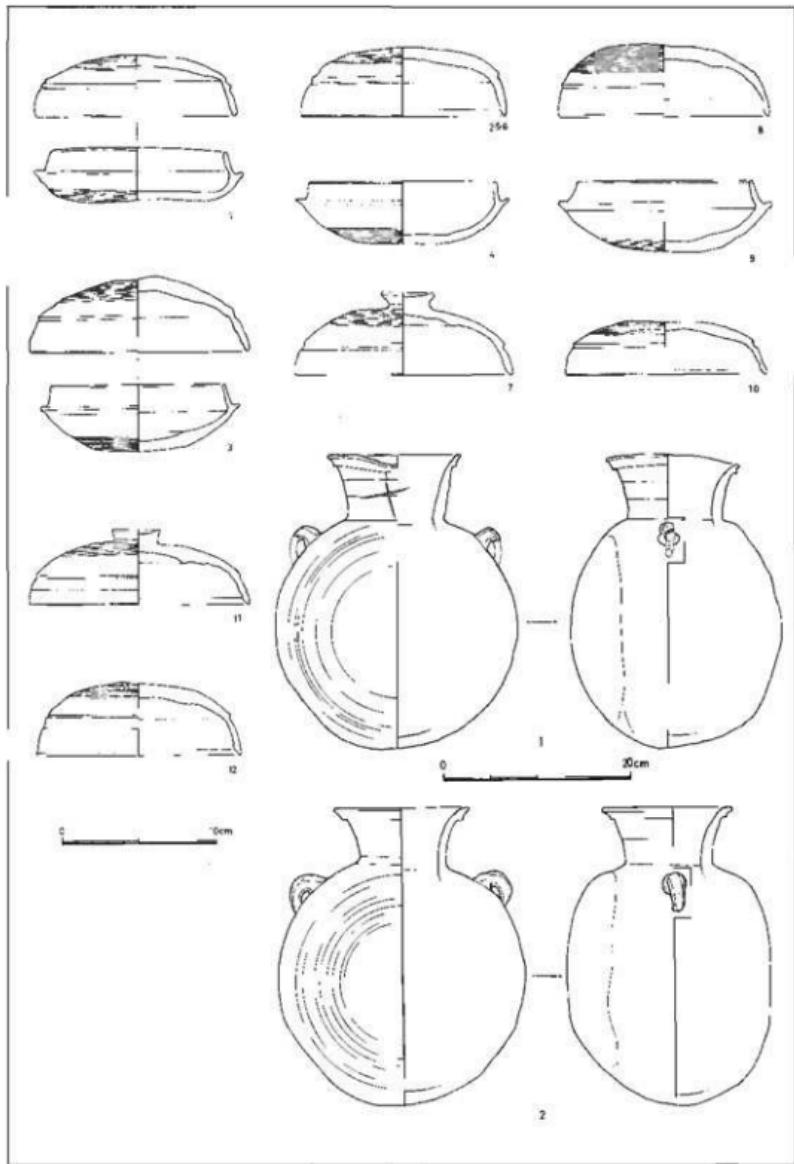
墳丘部分の調査では、前方部北側の墳裾で、くびれ部に向かって流れ込むような状態で大型の甕片が集中して発見されました。甕片は3個体でしたが、一方は口縁部から肩部が大きく歪んでいてとても実用にはならないものです。前方部での古墳の祭祀にのみ使用され、終わったあとで破碎され投棄されたものと思われます。



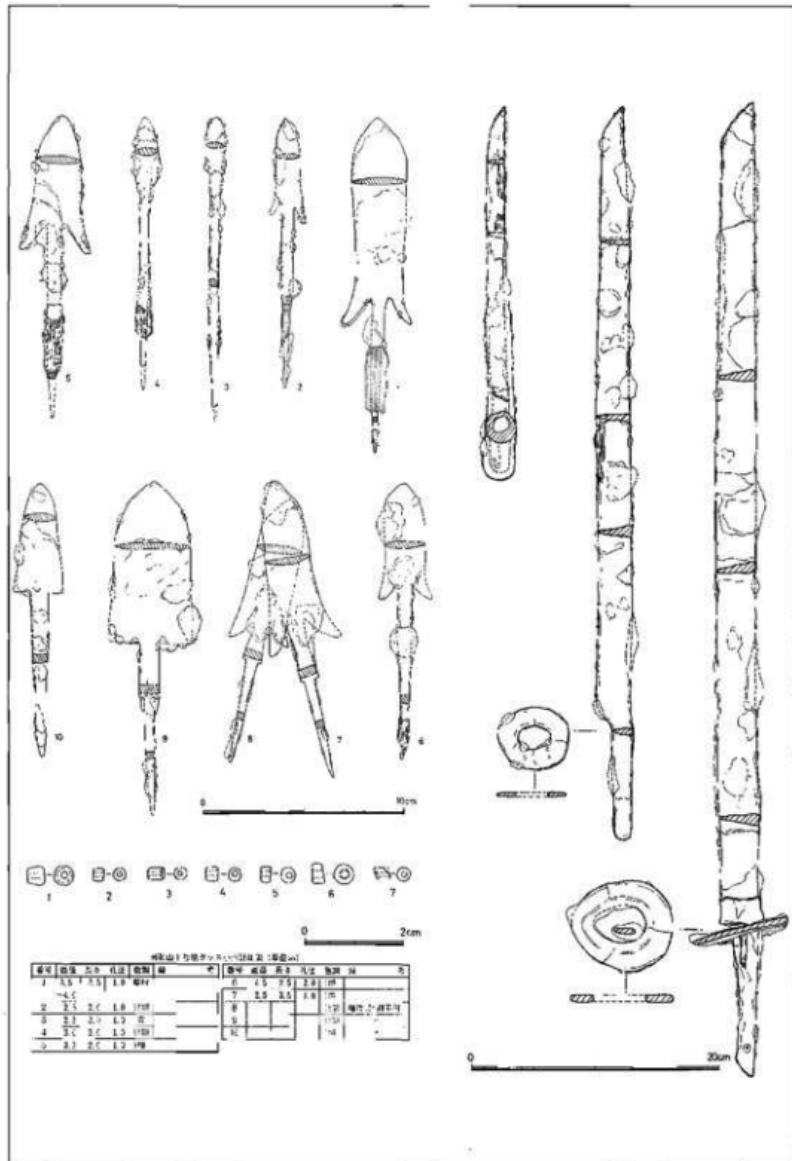
田和山1号墳玄室(遺物出土状況)



第4図 玄室内遺物出土状況図



第5図 須恵器実測図



第6図 鉄製品・玉類実測図

(2) 遺物の概要

玄室内の出土遺物を整理して復元したところ、大型の提瓶2個、蓋環2合、环身2個、环蓋6個（つまみ付2個）、直刀2振（いずれも鐔付。鐔は倒卵形の幅の狭いもので透孔のない簡素なもの）、短刀1振、鉄鎌12本（2本は実測不可）、銅具（かこ）1個、ガラス小玉10個（3個は破片）がありました。以下にそれぞれの詳細を述べてみます。

蓋環 1号提瓶を垂直に据えるために使用されていた蓋環2合と、环身・环蓋各1個、及び枕に使用したと思われる环蓋3個（1個はつまみ付）と环身1個、それに少し離れた櫛床直上にあった环蓋と、玄室床面の2個の石の上にあった环蓋（つまみ付）の計12個が出土しました。

1(1)・1(2)は1号提瓶を垂直に保つためにこの提瓶の底に差し込んでいた1合です。环身は口径11.2cm、器高3.4cmを計り、底部が低くつぶれた形をしています。环蓋は口径13.0cm、器高4.0cmで、口縁部が同様に歪んでいて一ヵ所でしか环身と合わせることが出来ないので、窯に入れて焼く時に合わせた状態で入れたため一緒に変形したものと思われます。

2・5・6は1号提瓶を支えるために3つに割られていた环蓋を復元したものです。破片のうちの2つは1号提瓶と玄室側壁の緩衝用として縫に差し込んでおり、残りの1片は蒸道近くの玄室床面に投げ捨てられたように置かれていました。口径13.2cm、器高は4.6cmあります。大井部は笠削り、他は回転ナテという技法によって調整しています。口縁部と体部の境は、突帯というより下部の沈線で区切ったように見えます。

3(1)・3(2)は1と同じく1号提瓶の下に差し込んでいた1合です。技法の特徴から、他の蓋環と同様に山本編年III期の時代のものと考えられます。环身は口径11.5cm、器高4.45cmありますが、环蓋は口径14.3cm、器高5.1cmを計り、合わせると蓋によって身は完全に隠れてしまいます。

4は环蓋2・5・6との一部と同様に石室側壁との緩衝用に使われていたものです。口径は12.2cm、器高



田和一号墳出土 壱類

は4.0cmを計ります。2・5・6とセットを成すように思われます。

8は玄室奥壁で枕に使用されていたと思われる4個の蓋壺のうち、最も左側に置かれていた（玄室中央寄り）壺蓋です。口径13.6cm、器高4.7cm。天井部は黒灰による自然釉がかかっています。口縁部と体部との境に僅かな凸帯部を作っています。

9は左から2番目の壺身。口径11.2cm、器高4.65cm。口縁端はやや鋭角に内側に削り込まれています。淡い自然釉がかかって僅かに緑色見えます。

10は3番目の壺蓋。口径13.1cm、器高3.5cmで、他の蓋壺より器高が低く感じられるもの。口縁部と体部との境は鋭い稜があります。口縁部内面に僅かな段が観察されます。

11は一番右側（玄室南西隅）にあったもので、円形で中央が窪んだ単純なつまみを持っています。口径14.3cm、器高5.0cmを計りますが、この内つまみの高さは0.8~0.9cmあります。こうしたつまみを有する壺蓋は有蓋高壺に付随するものと通常考えられていますが、この古墳では高壺は出土していないので、どこから転用したもののように思われます。また直刀の茎の下に置かれていたことから、直刀を支える為に特に必要としたのではないかとも考えられます。

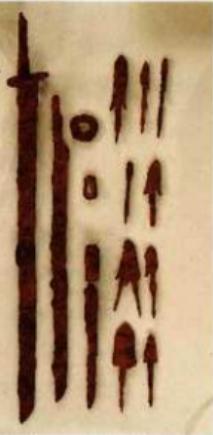
12は枕用の蓋壺とはやや離れた、ちょうど肩の上当たりにあった壺蓋です。口径13.2cm、器高4.75cmで、天井部の高い丸みをおびた蓋です。何らかの理由により当初の埋納位置から動いたものと思われます。

7は床面を2分する石の上にあったつまみ付の壺蓋です。口径14.2cm、器高3.4cmで、つまみ高は1.1cmあります。これも出土した状況から判断して埋葬された後に動かされたものと推定しています。

提瓶 提瓶は2個体出土しました。1号提瓶は玄室北西の玄門近くにあったもので完全な形で出土しました。口径14.2cm、器高31.6cm、胴部最大径26.1cmで胴部



田和山1号墳出土提瓶



田和山1号墳出土鉄製品

の二方を僅かに平坦に加工してあります。胸部は同心円状の回転ナデにより調整し、のち把手を手びねりで貼り付けたものと思われます。

2号提瓶は玄室南東隅に奥壁に立て掛けるように置かれていました。

田和山1号墳出土玉類

口縁部も別に整形してあとで胸部に付けたものです。口径14.0cm、器高31.6cm、胸部最大径25.6cmを計ります。把手は両方とも下半分が欠落しています。口縁部には範状工具による十字の沈線があります。

直刀 1号直刀は、玄室奥西側にあったものです。長さ81.1cm、刃幅最大3.1cmを計ります。完形品であり、8.0cm×7.0cm、厚さ0.5cmの鉄製の鐔(つば)と、それに続く鉄製の鯉口(こいくち)と呼ばれる部分が残っていました。茎先近くには目釘孔がありますが、他の一ヶ所は腐食していてよく判りません。断面は鋭い二等辺三角形をしていて、棟(むね)の厚さは最大0.8cmあります。

2号直刀は玄室中央に置かれていたもの。長さ58.8cm、刃幅最大2.8cmで棟厚は最大0.7cm。これも5.7cm×5.0cm、厚さ0.3cmの鉄製の鐔が付いていました。

短刀 刀身は長さ23.4cm、刃幅1.5cm、棟幅0.4cmの大きさです。この刀身が直径2.5cm、長さ12.4cm以上の鉄製の円筒状の筒の中にはめ込んであります。出土時にはこれが二つに折れていて、円筒状の鉄製品は用途がよく判りませんでしたが、刀身に残った円筒の直径が同じであることや、中が空洞になっていること等、短刀に鉄製の把(にぎり)を付したものではないかと考えるに至りました。

鉄鎌 鉄鎌は石室内の6ヶ所で発見されました。総数は12本以上あると思われますが腐食が激しいものを除いて、結局10本の形が判りました。

1は1号提瓶のすぐ南側にあったもので、長さは16.4cm、身の幅の最大2.6cmで、長さ1.4cmの逆棘(かえり)が付いています。2も1と同様1号提瓶の側にあったもので、長さ13.2cm、身幅1.2cmで、長さ0.8cmの逆棘があります。1に比べて非常に小振りです。3は2号直刀の北側に石室を三分するように南北に向けて置いてあったもの。細身の柳葉形で茎の先端を欠いています。長さ14.2cm、身幅は0.9cmあります。4は身先と茎先がありませんが、細い柳葉形で残存長11.7cm、身幅1.15cmあります。茎先付近に明顯な取り付け部の木部が残っています。

5は身の部分だけですが、1に比べると身が短いが同様に逆棘を持っています。

これも茎の中央から先にかけて木部が残っています。6は5よりやや小振りで、長さ13.6cm。茎先に木部が残っています。7と8は鏽で被覆していて離すことが出来ませんでした。7は長さ15.0cm、身の幅2.4cm。8は長さ13.3cm、身幅2.3cmで茎と身を明瞭に分ける凸部があります。4～8までは石室西側に置かれていた一群の鉄鎌です。9は長さ16.4cm、身の幅4.1cmの大型の鎌ですが、二等辺三角形状の逆輪のないものです。10は2号提瓶の内側にあったもの。単純な三角形の身で逆輪のないものです。大きさは長さ13.4cm、身の幅2.4cm。

ガラス小玉 ガラス小玉は合計10個見つかりましたが、この内の5個が完形品で出土、2個は復元により計測可能となりましたが、残りの3個は細片で復元も計測も出来ませんでした。1と6は直径が3.5mm以上のやや大きいものです。色調は緑色をしたものが多いのですが、紺(1)や青色(3)もあります。

IV. 小結

以上のことから、田和山1号墳は古墳時代後期（6世紀後半）に構築された古墳で、最初に埋葬されたあとで少なくとも1回の追葬が行われたものと思われます。天井石は転用されて失わてしまいましたが、それによって短期間で石室が埋没して、ほとんど盗掘は受けないままに現在に至ったものと推定されます。

この古墳は、石室の構造や規模等からみると古墳時代後期に通有の古墳です。しかし、この時期の出雲地方においては、田和山1号墳のような前方後円墳の構造は非常に少なくなり、横穴墓がたくさん造られるようになります。この横穴墓の中には、古墳に副葬されてもおかしくない遺物も発見されています。

これは中央支配の地方への浸透による社会的変革、大陸文化の伝播による他界観の変化、古墳建築に対する経済意識の変化などによるものと言われていますが、こうした時代の潮流に逆らって、なお前方後円墳を造り得たことは、この古墳がかなりの経済力と政治力をを持つ支配勢力の壇主的古墳ではないかと想像されるのです。

この古墳が古墳時代後期のものと確認されたことは極めて重要なことです。また副葬品も比較的良好く残っていて、古代の乃木地区の地域性と経済状態を知る上で貴重な古墳であると考えられるのです。

松江市文化財調査報告書 第47集

田和山古墳群発掘調査概報

平成3年3月発行

発行 松江市教育委員会
社会教育課

印刷 しまね東京印刷株式会社
松江市浜舟木町5丁目2-10



カラー写真（田和山古墳群玄室）